

今月のテーマである「一步を踏み出す」とは、純粹倫理に根差した実践にほかなりません。では、その一步とは具体的にどのような行ないを指すのでしょうか。

倫理法人会の会員であるA氏は、夫婦仲が良く、掃除と早起きも得意な人です。

入会を機に、①経営者モーニングセミナーへの出席、②毎日の自宅トイレ清掃、③妻とのコミュニケーションを大切にする、という三つの実践を決意しました。

いずれも素晴らしい取り組みです。しかし、純粹倫理の実践という観点では、本質的な「一步」とは少し異なります。

なぜなら、純粹倫理が目指す心のあり方とは、「ふんわりとやわらかで、何のこだわりも不足もなく、澄みきった張りきった心」を保つことだからです。つまり、純情（スナオ）な心境です。そして、その心を曇らせる最大の要因がエゴ（我）にあります。

したがって、本当の実践とは、長年の生活の中で積み重なったエゴを手放す行為ですが、それだけではエゴと向き合う機会に限られます。純粹倫理の実践としては、十分とは言えないのです。

では、エゴはどのような場面で表われやすいのでしょうか。それは、関係の良い相手ではなく、関係がうまくいっていない相手との間です。苦手な人こそ、自らのエゴを映し出す鏡なのです。

実際、A氏自身も倫理経営を学び実践する中で、そのことを痛感しました。経営者



エゴを捨てる一步が 自己の未来を拓く

として成果や効率を重視していたA氏は、意見の合わない社員や苦手な取引先に対し、自分の正しさを押し通そうとしていました。しかし、純粹倫理を学ぶなかで、相手を責める前に自分を省みることを意識すると、問題の多くは、自分のこだわりや思い込みに起因していたことに気づいたのです。

そうした気づきから、A氏は苦手な相手との対話を避けず、自ら歩み寄る実践を始めました。その結果、今まで見えなかった自分自身の姿に気づき、相手を変えるのではなく、自分が変わるからこそ倫理実践の本質であると実感したのです。

また、エゴが最も表われやすいのは家庭です。外では取り繕えても、家庭ではそうはいきません。家族の前では素の自分が現われるからです。「倫理法人会憲章」で家庭が重視されるのも、そのためでしょう。この視点をもつて実践を続けると、実践の本質が明らかになります。倫理研究所創設者の丸山敏雄は、次のように述べています。

進むことが、そのまま倫理の実践である。実践とは、「ふむこと」「ふむ」とは、新しく踐（ふ）むことで、一度ふんだことは、もう踐むのではない。（『清き耳』）

一つの実践も続けられれば習慣になります。習慣と実践は異なります。純情（スナオ）の境地を目指すなら、習慣を大切にしつつ、新たな課題に挑み続けることが必要です。苦手な相手や課題にこそ成長の機会があるものです。純粹倫理に根差し、より純情（スナオ）な心を目指していきましょう。